

# 地域リハ研究No.32

## ～平成23年度地域リハビリテーション協議会総会を開催～

平成23年5月30日（月）に、京都市身体障害者リハビリテーションセンターにおいて、総会を開催し、平成22年度事業報告、平成23年度の事業計画について承認いただきました。昨年度末の臨時総会にて、委員構成の見直しを行って以降初めての委員改選があり、新委員17名によりスタートしました。委員は以下のとおりです。（敬称略）

会長	上原 春男（学識経験者／医師）
副会長	加藤 博史（学識経験者／大学教授）
〃	池田 健（京都市身体障害者リハビリテーションセンター次長）
常任委員	久山 元（京都府医師会副会長）
〃	荒川林太郎（京都市社会福祉協議会 地域福祉推進室地域支援部長）
〃	居内 学（京都市保健福祉部障害保健福祉課長）
委員	牧 和義（京都市身体障害者福祉施設協議会会長）
〃	並河 茂（京都府理学療法士会会長）
〃	平山 聡（京都府作業療法士会会長）
〃	瀧澤 透（京都府言語聴覚士会会長）
〃	佐藤裕見子（京都府看護協会第二副会長）
〃	植松 理香（京都医療ソーシャルワーカー協会事務局長）
〃	酒伊 良行（京都市障害者地域生活支援センター連絡協議会理事）
〃	吉田 信吾（京都市居宅介護等事業連絡協議会理事）
〃	井桁 光（京都市生活介護等事業連絡協議会運営委員）
〃	山本 英生（京都市教育委員会事務局指導部総合育成支援課長）
事務長	中冨 郁郎（京都市身体障害者リハビリテーションセンター相談課長）
顧問	太田 勝己（元京都市地域リハビリテーション協議会常任委員）

## 平成23年度の事業計画

### 1 研修事業

京都市内におけるリハビリテーション関係機関に従事する職員等に対して、リハビリテーションに関する知識及び技術の向上を図るため研修を実施

#### (1) 身体障害者リハビリテーション関係職員研修

障害関係施設、事業所、介護保険関係施設等に従事する職員に対して、研修を実施

#### (2) 総合支援学校等教職員研修

総合支援学校等の教職員に対して専門性の向上に向けて、各校の希望に沿った形で新任研修及び派遣研修を実施

#### (3) 生活介護事業所に対する訪問指導

「障害者自立支援法第5条第6項」に定める生活介護事業所等に専門職員（PT等）を派遣し、施設指導員などを中心に、利用者個々の身体状況の把握や介助等に係る対応方法等について助言指導を実施

#### (4) 電動車いす講習会

身体に障害のある方やその援助者、サービスに従事する方を対象に、電動車いすの適切な操作方法や交通ルール等について実技を中心とした講習会を実施

#### (5) その他派遣研修

### 2 調査研究事業

身体障害者リハビリテーションセンターにおいて訓練を受けた高次脳機能障害のある方を対象に、グループワークを実施し、課題や交流を通じて、対人技能の向上、自信や意欲、楽しむ気持ちの回復、障害認識や現実検討力の改善を図ります。

### 3 啓発事業

#### (1) 地域リハビリテーションのつどい事業

ア 身体障害者リハビリテーションセンターで過去に訓練を受けた方で開催案内を希望される方を対象に、体力測定などを実施し、身体機能の維持及び社会活動への参加促進を図ります。

イ 言語の障害のある方が、自信をもって社会参加できるように、言語聴覚士が中心となって語らいの場を提供します。

#### (2) 地域リハビリテーション交流セミナー

医療、福祉のみならず、様々な角度から地域リハビリテーションの推進を図り、障害の有無に関わらず豊かに生活できる環境づくりについて、広く市民に啓発することを目的として開催

#### (3) 協議会ニュース「地域リハ研究」の発行

### 初任者向け

## 「からだの動かし方研修」を実施しました！！

初任者による介助業務における不安を解消するとともに、円滑な施設運営、利用者の処遇向上につなげていただくことをねらいとして、利用者の直接介助をされている方に限定した「初任者向け基本動作演習」として6月に実施しました。

初めての試みのため、6名定員を4講座で企画したところ、募集開始4日目にしてお申込みが定員を上回り、「うれしい悲鳴」となりました。ところが、その後も「ピーッ」というFAX受信音とともにどんどん申込書は増える一方。急ぎよ、経験年数の浅い方から順次受講者を決定するとともに、定員倍増と1講座増設を決めました。それでも、最終100名を超えるお申込みをいただき、やむなく50名近くの方にお断りの連絡をさせていただいた次第です(T\_T)。受講できなかった方々には深くおわび申し上げます。

経験年数10年を超える方のお申込みも多数あり、中には、「事業所代表で受講し、伝達したいから」という方も複数おられ、研修とはいえ、業務を後回しにできない現場の御苦勞も伝わってきました。改めて、現場で働く方のニーズを痛感したところです。

受講者の平均経験年数は、6.4箇月で、約半数の方が経験年数4箇月未満で、「初任者向け」という当初の目的は果たせました。実技では、質問が出されるたびに、全員が集まってこられ、「わずかなことでも聞き逃さない」といった皆さんの意気込みが感じられました。結果、どの講座も終了時刻が予定を超過してしまい、受講者の皆様方には、御迷惑をおかけしましたm(\_ \_)m。

受講者アンケートの結果では、「身体の重心を意識した動きなど基本を習得できた」「利用者も自分も楽な動きができる」という感想がありましたが、中には、「在宅では、利用者の環境が様々で、基本的な身体介護技術を見落としがち」という訴えもありました。

さて、「京都市身体障害者リハビリテーション関係職員研修」はいよいよ9月9日から始まります。この「からだの動かし方研修」に相当する講座を、例年より回数を増やして開催します。今度は、経験年数は問いませんので、受講できなかった方はもちろん、日頃の介助動作に疑問を感じている方は、ぜひお申込みください。

## 仲間との交流がもたらすこと



身体障害者リハビリテーションセンター  
心理判定員 櫻井 直子

障害を持つ方の支援に関わる中で、当事者の方同士の支え合いが大きな力となることを実感します。「仲間との交流がもたらすこと」という視点で主な効果二つをあげてみました。

### 1 集団への初期適応に役立ち、所属感や相互理解を高める

私は以前、精神科のデイケアにいたのですが、精神科領域では対人関係への不安や苦手意識を持つ方が比較的多いので、特に初期の集団への適応がスムーズにいくよう配慮をします。この初期適応は大変重要です。精神科領域に限らず、他の障害施設、高齢施設でも新しい環境、新しい集団に入ることになった人は緊張が強まり心細く感じる事が少なくないと思います。周囲の人は余裕でこなしているように見えて、自分だけがなじめない・・・と過度に自信をなくしたり、疎外感を感じやすくなります。周りの勧めでやっと利用に結びついたのに、「なじめない」「何か雰囲気合わない」と行くのを嫌がられ、周囲の期待もむなしく自宅にこもることになるケースもあります。一度苦手意識をもたれると次の施設やサービス利用にも消極的になります。支援や訓練が必要なのに、その機会に結びつけられないということになるのです。

こういうときに、新しい利用者さんに対して、はじめに少人数でのゆるやかなコミュニケーションの機会、できれば何か共通点のあるなじみやすそうな人や小グループと知り合う機会を提供すると、その後の集団への適応が良いように感じます。大きな集団になればなるほど気後れもしますし、なじむのにハードルが高くなります。そこで一緒に過ごす人をある程度固定できるよう小グループを設け、そこからなじめるよう工夫することも一つの方法です。前述の精神科デイケアでは、慣れた利用者さんに新しい利用者さんの“お世話係”をお願いしていました。「何かわからないことがあったらスタッフ以外にも、〇〇さんや△△さんが教えてくださいね」と紹介し、お世話係の方には「はじめは、わからないことばかりだと思うので気がついたことがあれば教えてあげてくださいね」とお願いしておきます。お世話係の方は、自分も不安でいっぱいだった時に声をかけてもらってうれしかった・・・と言う方が多く、プログラムのことから始まり次第にスタッフの個人情報まで(!)、親しみをもったインフォーマルなサポートをしてくれます。お世話係の方にとっても、人の役に立つ経験、頼られる経験が自信回復につながっていくようです。そして新しい利用者さんが不安を感じやすいのは意外に休み時間です。自分でゆっくり休憩できる方は安心なのですが、「することが決まっているプログラムや作業の時間はいいけれど、休み時間はどこに座ってどう過ごしていいかわからない」とストレスを感じる方が少なくありません。このときにお世話係が気にかけてくれる、お世話係に聞くことができるという安心感がよりどころになるようです。

集団の中には他者との交流が乏しく孤立しがちな人がいますが、こういった方も一人でいることを望んでいる方ばかりではなく、交流の機会を提供すると応じてくださることが多いです。昼ごはんを食べながら等の自然な場面でもいいですし、交流会やミーティングのような設定した場面でもいいでしょう。そういう方に後で感想を伺うと、「聞くだけでもいいと言われて気楽になった」、「自分からは声はかけられないけれどスタッフが進行してくれると話しやすい」、「人の話が聞けて楽しかった」などと話されます。いつも寡黙な方のユニークな一面を知ったり、共通の趣味を持っている仲間を発見したり・・・、これらの交流は「この集団の一員である」という所属感を高め、利用

者間の相互理解につながります。そしてスタッフがいない場面でもポツポツと会話が生まれるようになります。

## 2 個人の成長や問題の解決を促す

支援に関わる中で、ご本人の目標と周囲の評価のズレが大きい方や停滞して動けない方にお会いします。ところが家族やスタッフから働きかけてもなかなか変化が見られない方が、仲間と会話することによって、感情表出や自己理解や障害認識が進んだり、目標志向的に変化したりすることがあります。これは他人の多様な意見に触れるということもありますが、相手が同じような経験をした人であるからこそ助言が伝わりやすく、影響力を持ち、共感することができるのでしょう。

特に身近な人が次のステップ（資格取得勉強や就労、単身生活、新しい役割や訓練、趣味など）に挑戦している姿は、周りの人に大変刺激になります。自信が乏しく、能力はあるのに就労への一歩が踏み出せなかった方が、こういった姿を見て自分も挑戦する決意がついたり、また逆にいつも自分の能力や体力以上の仕事を求めては続かない人が、シビアな話を聞いて現実検討が深まったりします。なかなか浪費癖が直らず家族との関係が悪化していたある方は、実際に他の人の小遣い事情や金銭管理の工夫、仕事の大変さなどを聞くことが、お金の価値を考える良い機会になり、自分が甘えていたのかな・・・と家族の意見にも少し耳を傾けられるようになりました。

また「障害を持ってから、まだ以前の友人には会う気になれない。気を遣われるのが嫌だしこんな自分を見せたくない。だけど、ここの人となら話せるようになった。」という方がおられました。障害受容は容易なことではありません。頭では分かっているけど気持ちが伴わない・・・後悔の繰返しで先のことが考えられない・・・という方が、自分と同じように落ち込み葛藤している人の話を聞くと「私も同じなんですよ!」と共感され、気持ちや考えを表出しやすくなることがあります。そして、葛藤を経て日常生活に再び楽しみや張り合いを見出している人を間近に見ることが刺激となって、その方の意欲も引き出されてくるのです。

これらは一度のやりとりでめざましく変化するわけではありません。交流を重ねる中で、その方にヒットする話を適したタイミングで共有できれば、個別支援だけではなかなか変化が見られなかった気持ちを動かし、行動につなげることができます。これがグループの力（＝グループダイナミックス）です。この際、支援者が各利用者さんの背景や課題を念頭に入れながら、グループの構成メンバーや話題を考慮したり、適宜介入（疑問を投げかけたり、他の人の感想を求めたり）することが必要です。もちろん前提として、支援者自身が日頃から共感的な対応を心がけ、参加者が安心して発言できるような雰囲気を作ることが大切なことはいまでもありません。

日頃の支援の中で、利用者間の共感的な交流の機会が増え、それがひいては仲間同士の支えあいにつながっていけばうれしいことですね。



### お知らせ

「地域リハ研究」をインターネットで御覧いただけるようになりました。  
京都市身体障害者リハビリテーションセンターのホームページ  
[http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/soshiki/8-1-4-0-0\\_19.html](http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/soshiki/8-1-4-0-0_19.html) の  
「地域リハビリテーション推進事業」のバーをクリックしてみてください!!

編集・発行	京都市地域リハビリテーション協議会事務局
	〒604-8854 京都市中京区壬生仙念町30番地
	京都市身体障害者リハビリテーションセンター相談課内
電話	075-823-1666/FAX 075-842-1541